

『般若波羅蜜多心經幽贊』における三練磨心について

葉 阿 月

〔一〕 仏教の最高目標は一口で言えば、身心共に「離苦得楽」の境地に到達することである。この目標に関する文句は、般若波羅蜜多心經（「心經」、玄奘訳本約 260 字）における前文に「度一切苦厄」、後文に「能除一切苦」と主張されている。ところがそれら二句の中、後句は「故知般若波羅蜜多是大神咒，是大明咒，是無等等咒」という文章と結びつけられており、その「能除一切苦」は梵藏兩經典において“Sarva-duḥkha-prāśamaṇaḥ” “sdug-bsñal tham-cad rab-tu shi-bar-byed-pa” とある。これにたいして、前句は「觀自在菩薩，行深般若波羅蜜多時，照見五蘊皆空」という前文と結びつけられているが、残念ながら、その「度一切苦厄」は梵藏兩本に略されている。それにも拘らず、窺基（慈恩大師，A. D. 632～682）は『心經幽贊』において『撰大乘論』（撰論）と『成唯識論』（成論）に述べている三練磨心の中の第三練磨心の主旨によって、この「度一切苦厄」の釈文を述べており、更に第二練磨心の主旨にもとづいて、唯識菩薩行の実踐論（約 14,000 字）をもって、「行深般若波羅蜜多時」の九字を説明している。これは他の心經諸註釈書に見られない特色であり、その重なる理由は次の二点であると思われる。

(1) 般若波羅蜜多の中国的解釈：窺基は慧淨（A. D. 578～645）と同様に、「般若」とは、従来の三義（実相，觀照，文字）の外に，萬行（六度）の意味を有する「眷屬」と，諸法の義を代表する「境界」の二義があると説明している（大正 33, p. 524 上，卍統藏 41, p. 206 左）。又窺基は「波羅」について，従来の菩提涅槃義の外に，所知，教，理，行，果の五義があると主張している。かくして兩句に「行」という実践の義が含まれているのみならず，更に「蜜多」とは，

「離義，到義，由行般若離諸障染，境尽有無，解窮六藏，義洞真俗，業備二因，覺滿寂円，斯昇彼岸，体用兼孝，故立此名」

と述べているように，特に般若の実踐義を重視しているのである。

(2) 唯識法相宗の立場：窺基は玄奘三蔵（A. D. 600～664）と共に中国仏教の唯識法相宗を創立した方であり，心經を註釈する前に，『成論』，『瑜伽師地論』（瑜伽論），『阿毘達磨離集論』（離集論），『弁中辺論』等にたいして註釈を書いた方であるから，彼の『心經幽贊』は円測（A. D. 613～696）の『心經贊』と異なって，

上述の唯識論書から唯識中道説と唯識実践説等の資料を多く引用している外、更にそれらの説を巧みに現実修行に活かし、もって苦からの解脱、更に衆生の救済から仏地境界に到達するという唯識実践論を般若空の実践論に結びつけている。

〔二〕唯識瑜伽行派が主張する実践論は唯識三性説の悟入から真如唯識性の体験に至るまでの種種なる厳しい実践道(五位等)にたいする説明であるから、『撰論』に述べている三練磨心は、入所知相(三性)を支持する善根力として認めている八種(八処、或は八句)の中の三種である。そして『成論』に述べている三練磨心は、資糧位における修勝行に起った三種退屈にたいする三種対治であるというように同じ三練磨心の術語も両論における用途は多少異なっている。本稿はそれらについての比較研究に深入りするのでなく、寧ろ『心經幽贊』に引用されている三練磨心と関係ある玄奘訳等の資料をさぐりたいので、先づ次表において、玄奘訳の『撰論』、『成論』及び窺基の『成論述記』等に述べている三練磨心の定義文を参考として比較した。然し紙幅制限の為、本稿における諸表にたいする詳解と註記は省略させていただいた。

要するに下述比較表によって、「成論」の説は第二練磨心を除いて、『撰論』

三 練 磨 心

論名	第一練磨心	第二練磨心	第三練磨心
撰 大乘論 (大正31, p. 142中)	無量諸世界・無量人有情, 刹那刹那, 証覺無上正等菩提, 是為第一練磨其心	由此意樂, 能行施等波羅蜜多, 我已獲得如是意樂, 我由此故, 少用功力, 修習施等波羅蜜多, 當得圓滿, 是為第二練磨其心	若有成就諸有障善, 於命終時, 即便可愛一切自体圓滿而生, 我有妙善無障礙善, 云何爾時, 不當獲得一切圓滿, 是名第三練磨其心
成 唯識論 (同上, p. 49上)	聞無上正等菩薩廣大深遠, 心便退屈, 引他已証大菩提者, 練磨自心勇猛不退	聞施等波羅蜜多難可修, 心便退屈, 省己意樂・能修施等, 練磨自心・勇猛不退	聞諸仏圓滿轉依, 極難可証, 心便退屈, 引他龜善, 況己妙因・練磨自心, 勇猛不退
成 唯識論述記 (大正43, p. 564中)	初練磨心中云, 広者無辺, 大者無上, 深者難測, 遠者時長, 彼既大夫, 我亦爾, 不応自輕而退屈, 第一練磨心広深退,	第二練磨心難修退	第三練磨心難証退

心經幽贊 (大正33 pp. 524中-536上)	今標菩薩先修行人，觀示發心，初練磨也，謂聞菩提廣大深遠，若生退屈，應練磨心。彼觀自在，昔初發意，具諸煩惱，於無明殼建立勝心，捨身命求仏智慧，與大勇猛，已成等覺，我亦應爾，勵己增修，不應自輕而生退屈	如応者言，頭由学慧方照性空，示先所修法，第二練磨心也。謂見菩薩万行難行，若生退屈應練磨心。我無始來，為求世樂，尚能備受無義衆苦，況求菩提為出生死，度有情類，生怯劣心，此深般若，彼己修学，我亦應爾，省己增修，不應退屈	如応者言，由照性空，能越生死，頭先修益，第三練磨心也。謂觀轉依深妙難証，若生退屈，應練磨心。世間有情行龜施等，於命終位，尚招勝果，況我今修無障妙善，當來不証度苦転依，如彼行慧，己度苦厄，勵己增修，不應自輕而生退屈
---------------------------------	--	---	--

の説と異っているように見えるが、然し第一練磨心について世親の『撰論釈』三本は等しく、無上正等菩提は甚深廣大にして証得し難たいことを補述している(大正31. pp.200中, 295中, 350中)ので、『成論』の文意はその世親釈にもとづいた説であるともいえる。というのは、窺基は『成論述記』に初練磨心を説明する前に『撰論』巻第六の三練磨心の文を引用しているからである。それ故に『心經』の前文である「觀自在菩薩」にたいして發菩提心等の修行についての第一練磨心を説明している。第三練磨心について、『成論』と『心經幽贊』に転依のことを述べているのは、世親の『撰論釈』に「転依」の思想を述べているからである。かくして、窺基は「心經」における序文の初句である「觀自在菩薩」と後句である「度一切苦厄」にたいして第一練磨心と第三練磨心を説明したのは、この世に住む人々をして觀自在菩薩の如く大勇氣をもって、無明等の諸煩惱から菩提心を起し、身命を捨てて仏智慧を求め実践すれば、必ず「離苦得樂」という転依の仏地境界に到達することができることを確信させたいからであろう。特に般若波羅蜜多の実践者である觀自在菩薩を等しく、唯識瑜伽行の三練磨心修行に成功した実践者であると見たところに窺基の独特の見解があると言える。

さて第一練磨心を経て第三練磨心を完成させる重要な役割をするのは第二練磨心である。『撰論』と『成論』は同じく施等波羅蜜多の実践に関する第二練磨心を述べている。『成論述記』に述べている「難修退」と『心經幽贊』に述べている「萬行難行」は何れも六波羅蜜多の修行は難しいということを意味している。以上は『撰論』、『成論』と『心經幽贊』に述べている三練磨心のやや似た部分の説明を紹介したのである。

〔三〕第二練磨心にたいする複雑な説明については真諦訳の世親釈と玄奘訳の無性釈(大正31. pp. 200下, 414上)にも相互に異った説が見られるが、窺基は

心經幽贊に於ける第二練磨心の重要内容の分類

内 容	經 論
<p><u>五位修行の資格</u>：要具大乘二種姓：(1)本性住種姓……(2)習所成種姓</p> <p><u>五位の概説</u>：(1)資糧位（發菩提心……住四十心）(2)加行位（修四種等持）(3)通達位（入初地，見道）(4)修習位（修十地，修道）(5)究竟位（金剛定後……円満仏果）</p> <p><u>五位修行の基盤</u>：(1)發心（先具十勝徳，起三妙觀，正發菩提心）(2)發願（先起信等五根……願如釈迦等三仏經三大劫）</p>	<p>A. (幽贊)，大正33. pp.525上……526上</p> <p>B. (瑜)，大正30. pp.478下……482中</p> <p>C. (Bs bh, Dutt本). pp.2……14</p> <p>D. (成)，大正31. p.48中</p> <p>E. (述記)，大正43. pp.555下……556下</p>
<p><u>五位応修行について</u></p> <p>(一)略修行（三種）</p> <p>A. 境（所觀境界）：觀三性（遍，依，円）等</p> <p>B. 行（修正行）：聞，思，修所成……唯識觀最為第一</p> <p>a. <u>五重唯識觀</u>：(1)遣虛存実（空有相對唯識觀），(2)捨濫留純（心境相對唯識觀），(3)撰末歸本（用体相對唯識觀），(4)隨劣頭勝（所王相對唯識觀），(5)遣相証性（事理相對唯識觀）</p> <p>b. <u>五位の唯識觀</u>（三慧と種現二修）：(1)資糧位，(2)加行位，（雖得修觀は猶帶相故，未能証実），(3)通達位（住極喜地，生如來家），(4)修習位（十地中，真俗唯識……八地已上，……任運空中起有勝行）：(5)究竟位（雖更不修，念念具能緣真俗識）</p> <p>C. 果（修行果）：有漏修者……滅世……妙果，無漏修者……得大菩提</p>	<p>A. pp.526上……527下</p> <p>義林章第一，大正45 pp.258中……259上</p>
<p>(二)広修行（三種菩薩行）</p> <p>A. 所學處（五種）：(1)所化處，(2)利行處……(5)菩提處</p> <p>B. 修學法（七種）：(1)応具多勝解，(2)応求正法（五明），(3)応説正法……(4)応正教授……(7)応住三業</p> <p>又修種種（六波羅蜜多……四攝事……四無量……四依……四無碍解……一切種妙智……）</p> <p>又修修願（一種……十種……四嚧陀南……五無量）</p> <p>◎於十地中，修十勝行，十重障，証十真如</p> <p>C. 能修學（十二位）：(1)種姓住……(12)最上成滿菩薩住</p> <p>(13)如來住</p>	<p>A. pp.527下……528下</p> <p>B. pp.482下……565上</p> <p>C. pp.15……253</p> <p>D. pp.51上……54中</p> <p>E. pp.574中……593上</p>
<p><u>十三住と十地・七地・及び三無教大劫との關係</u></p>	<p>A. pp.534下……535中</p> <p>B. p.562上</p> <p>C. p.242</p> <p>E. pp.557下……583上</p>

(216) 『般若波羅蜜多心經幽贊』における三練磨心について (葉)

『心經幽贊』において、それらの説を省略した代りに、『瑜伽論』、『成論』、『弁中辺論』等の説を採用し、或は新たに組織した独自の説を述べているので、本稿では、前頁の如く、『心經幽贊』に述べている第二練磨心の重要内容を分類すると共に、その資料(所引の偈文は除く)と関係ある諸論書の頁数を記し、もって窺基の独特な学説をさぐることにする。

前頁の分類表に示しているように、五位修行に関する諸説(略修行を除いて)は窺基の独創説ではないと言えるが、然し広修行の資料は、たとえ『瑜伽論』から借用したものであるにしても、それら十四卷(菩薩地第35卷~第49卷)即ち大正大藏經の88頁という長い説明文を『心經幽贊』の6頁に縮小し、又それらの文意を組織かえしたことは、窺基の研究成果の一種であると言える。要するにその膨大な資料の梵漢比較研究は他日の機会に譲り、目下それらの特色の一一を列挙することができきないが、然し略修行としての境、行、果の三種の中、第二「修正行」に関する五重唯識觀の説は『義林章』と『心經幽贊』のみに述べている説であるから、その「五重」という五項目だけが窺基の新立であるだけでなく、更にその内容を研究すれば、そこにも多少なりと窺基の創説が見られる。そこで、初歩的研究として次の二例を挙げれば、(1)「遣虚存実」、即ち空有相对唯識觀とは、主として、遍計所執は虚妄であって体用でないから、遍計所執性を遣って、諸法体である依他起性と円成実性の実有を觀ずるという空觀と有觀にたいする破執の説明等であるが、特に「心經幽贊」は「義林章」よりも次の文を述べている。

「諸処所言、一切唯識、二諦、三性、三無性、三解脱門、三無生忍、四悉檀、四嚙拈南、四尋思、四如实智、五忍觀等、皆此觀攝」。

(2)「遣相証性」即ち事理相对唯識觀とは、依他起性の心識は理事を具えている。その中の事は相用であるから、その事相を遣って、理を性体とする円成実性を証するという説明等である。殊に「余經(勝髮經)説、心自性清淨」(大正33. p. 527中、大正45. p. 259上)という引用文の後に「心經幽贊」は『義林章』よりも次の文を述べている。

「諸法賢聖皆即真如、依他相識根本性故又説一諦一乘一依、仏性法身、如来藏、空、真如、無相、不生不滅、不二法門、無諸分別、離言觀等、皆此觀攝」。以上の如く、窺基は、三性だけが有無相对唯識觀を示すのみでなく、更にこの世のあらゆる二諦から五忍觀等に至る真理も同様にこの第一唯識觀に属するのであると主張し、以て第五唯識觀についても、円成実性の真如だけが事理相对唯識觀を示しているのみでないから、この真如に等しい仏性、如来藏等の離言觀も皆こ

の遣相証性唯識觀に属するのであると主張している。特に結論として、空有、境心、用体、事理、所王の五種はこの世のあらゆる一切の相對唯識觀を含めた唯識妙理であるが、それらの唯識は資糧位に属する四十心において、たとえ教を聞き、信じ、思惟して心を觀ずるといえども、未だ二取の空を觀じていない。それ故に次に加行位から通達位、更に修習位等の修行によって真俗識を觀じ、勝行を起し実践した後に究竟位に至るのである。雖えそこで更に修行をしないが、念念に能緣真俗識を具えていると主張しているのは現実に適しい説であると言える。

この真俗識は、勿論窺基が五重唯識觀を述べる前に、すでに「修正行」を説明している文の中に、「計所執性唯虚妄識、依他起性唯世俗識、円成実性唯勝義識、是故諸法皆不離心」と述べている主旨によるものである。勿論、この文の「不離心」の「心」は、前述の虚妄識、世俗識、勝義識を含んでいると共に、「華嚴經」に述べている三界唯心の「唯心」即「唯識」を意味している。それ故に、窺基は特に次の如く解釈した。

「唯言為遮所執我法離心而有、識言為表因緣法性皆不離心、顯法離心決定非有、名為唯識、非謂一切唯一識心更無余物、善友惡友諸果諸因理事、真俗皆不無故」

というように唯識の真義は真俗の存在を否定しない、もしもそれを否定すれば、如何なる修行も、又菩薩が衆生を救済するという実践もできないのである。要するに窺基は依他起性である虚妄分別 (abhūtaparikalpa) の識性は転依の前後にも存在していることを重視したことは、彼が「心經幽贊」の序文に弁中辺論相品第一、第二：「虚妄分別有、於此二部無……是則契中道」を引用して唯識中道説の經証とした外、又心經の「色不異空……空即是色」に対する説明文に第四：「虚妄分別性……許滅解脱故」を引用して、「非謂依他如幻之色亦皆空」の經証としたのは、虚妄分別は空有に具した心識であり、又空有を超越した中道性の心識でもあるからである。それ故に、この心識は瑜伽行者の修行如何によって輪廻と転依の真俗識として顯われるのである。

〔四〕 瑜伽行者の修行法の一つとしての三練磨心の「心」とは何であるか？それは依他起性の心識とどんな関係にあるかは、『撰論』と『成論』と『心經幽贊』において明確な説明を述べていないようである。『撰論』に顯われている練磨心（転心）の西蔵語は“sems-sbyon-ba”であるにたいして、長尾先生はその梵語を“citta-uttāpana”と認めた（『撰論』下、講談社 pp. 16～17）。『集論』に正断修習 (saṃnyak-prahāṇa-bhāvana) を説明する時に引用した經文に「生欲策励、發起正勤、策心持心」(chandaṃ janayati vyāyacchate vīryam ārabhate cittam praṅgṃ-

(218) 『般若波羅蜜多心經幽贊』における三練磨心について (葉)

ati cittam pradadhāti) (大正 31. p. 684下 AS. Pradhan 本 p. 72¹⁹⁻²⁰) とあるにたいして、『雜集論』(大正 31. p. 739 下 ASbh. Tatia 本 pp. 86²²~87²) に

「若沈沒隨煩惱生時、為損滅彼故、以淨妙等作意策練其心；若掉拳隨煩惱生時、即以內証略撰門制其心、爾時名為發起正勤」(yadā tu layopakleṣe utpanne tad apakarsanārthaṃ prasadanīyādi-manaskāraiḥ *cittam unnamayati*; auddhatyopakleṣe cotpanne pratyās-aṅkṣepa-mukhena *cittam dharayati* tadā vīryam ārabhata ity ucyate)

と述べている策心 (*cittam praḥṇāti*)、持心 (*cittam pradadhāti*)、或は策練其心 (*cittam unnamayati*) と制其心 (*cittam dhārayati*) という術語は「練磨心」の同義語と言えよう。要するに、沈沒と掉拳の随煩惱を対治するのに、清淨等の作意によって「心」を策練、或は制持すると説明している、『撰論』と『瑜伽論』等においては、清淨行意の外に「清淨」意樂の働きを重視している。たとえば、無性の「撰論釈」に、意樂 (*aśaya*) が慳恪、欲尋、恚尋、懈怠、昏沈、睡眠と無明等の弊縛を遠離したので六波羅蜜多の修行ができることを述べている (p. 414上)。『瑜伽論』 (p. 556 中一下 Dutt 本 pp. 227²⁵~228⁷) に、

- (1) 「若諸菩薩先於極歡喜住、由十種心_レ意_レ樂 (daśākāreṇa *cittāśayena*)、已得意樂清淨… …如是十種倒意_レ樂依_レ心而_レ轉 (ime daśa samyagāśayās tasmīnś *citte pravṛtṭā bhavanti*)、是故說為意樂清淨」。
- (2) 「問増上心住、菩薩轉時… …復由余十淨心_レ意_レ樂作_レ意思_レ惟、成上品故、極円満故」(同上 p. 557 上) (*daśabhir aparair akāraiś teṣāṃ *cittāśaya-manasikarāṇaṃ* adhīmā-tratvāt paripūrṇatvād…*) (同上 p. 229⁸⁻⁹)

と述べている。『心經幽贊』において、

「極歡喜住、即是初地、如前白品并十大願、皆現円満、由此転名淨勝意樂… …、増上心住、即第三地、由前作意解了通達、復由十淨心得入此住」。

というように意樂、作意と心との関係を述べている。特に上記(2)の漢訳「淨心」の「淨」は梵本に略されているのは、第三地においても、更に練磨心の必要があることを示しているが、その心は何であるかは明示していない。

窺基は遺存虚実識觀を説明した文に「識者心也」と主張した『義林章』ではそれについて、特に『成論』の説として八識、心所、相見二分、空理所顯真如は皆識と離れないから識と名くと説明している (大正 45. p. 258 中一下)。この説明文を略した『心經幽贊』においては、『心經』に述べている五蘊の「識蘊」、十二処の「意処」、十八界の「意識界」の三種に対して、等しくそれらは「心・意・識」であると述べたが、更に意識界の説明に、「心謂第八識」、「意謂第七識」、「識謂

余六〔識〕と説明した外に、第八識は「善無覆性」、第七識は「性善有覆」であるというように両者に共通した善性がある故に、両者の各三位に活躍している各々の「識」と「末那」(manas)等にも相互に関係があることを説明している。即ち初位としての阿頼耶識と有覆末那、次位としての異熟識と無覆末那、後位としての阿陀那識と但名末那というように三対の能縁の関係があるが、瑜伽行者の修行によって、初位の一対は第八地に、次位の一対は第十地に滅せられる。然し後位の一対は無始から如来が未来際に衆生を救済するまで続存していると述記に述べている(大正43. pp.298上 344上)。

以上の諸学説によって、第十地に至らない修行者の練磨心という心は、阿頼耶識、異熟識、阿陀那識という第八識と、有覆末那、無覆末那、但名末那という第七識と、思惟分別性の第六識と、五境に対して五種の認識作用をする五識、即ち総じて八識である外、それらに相応する善、悪、無記の諸心所をも含むものを指しているのが窺基の識即心という意味であると思うのである。かくして多種多様の特質を有する心意識と諸心所法を代表する「心」(citta)というものは仏地に到達しない前、即ち修行段階に居る間、何時もいろいろな煩惱心所によって「心」(八識)が汚されているから、自然に修行に対する退屈心が起るので、瑜伽行者は五重唯識観によって、精進心、無厭心、慈悲心等の淨心意樂作意をもって、広修行としての厳しい十勝行の十波羅蜜多を修行しながら、それらの所対治である十重障を断じて十真如を証するように努力しているその心の状態を心の修練、換言すれば「練磨心」というのである。

〔五〕結論的に言えば、窺基は三練磨心の中、特に第二練磨心について、煩しい、且つ厳しい唯識実践論をもって心経の「行深般若波羅蜜多時」を説明している点に特色がある外、その練磨心の心を唯識説の広狭義に属する心意識心所であると暗示し、更に発菩提心を五位修行の基盤とする説に応じて、第八識と第七識は等しく善性であると主張している点は、『成論』に見られない独創説であると言えるのである。

〈キーワード〉窺基、第二練磨心、五重唯識観、第八識善無覆性

(国立台湾大学教授)